



国境なき子どもたち (KnK)

インドネシア北西部、スマトラ沖地震・津波で被災した
青少年に対するビデオワークショップ
(2005年4月－5月)

実施報告書

報告者

オペレーション・ディレクター 清水 匡

(2005年5月31日)

国境なき子どもたち インドネシア ビデオワークショップ

僕らの町は色を失った

開催期間：2005年4月10日～5月10日（実施日数12日間）

対象者：地震・津波により家族や友人を失った青少年（男子8人 女子6人）年齢17歳

実施日程および実施内容：

初日

9人（男子6名、女子3名）の高校生が集まりビデオワークショップを開始する。1名を除きこれまでビデオを使ったことも触ったこともない子どもたちが参加した。簡単なビデオの説明の後、9人に自由に撮影させる。初めは戸惑っていたが撮影し始めるとカメラで遊ぶように楽しんでいった。それぞれが撮影したものを皆で見ることにより、カメラの使い方に親しんできた。その後、カメラの構え方や動かし方、ズームなど基本的な撮影のテクニックを指導する。練習中に質問なども出てカメラに興味を持ち始めた。



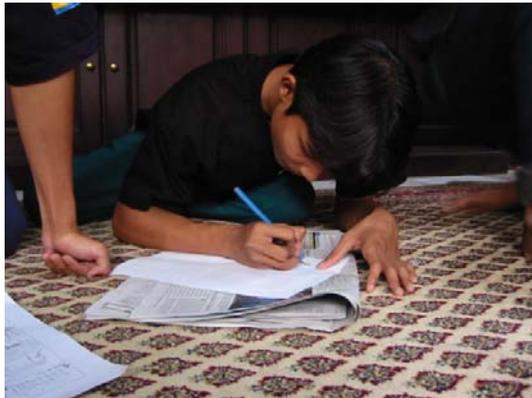
2日目

三脚を使ってインタビューの練習をした。ビデオ作りは撮影だけでなくインタビューも大切な要素である。部屋の中では飽き足らず外に出てインタビューを始めるほどの勢いである。



3、4日目

バンダアチェは、2004年12月26日に起きた地震と津波で町の半分が破壊されてしまった。今回のビデオはその津波のことをテーマにするということで話を進めていった。今回参加したメンバーの友だちの中で家と家族を亡くした青年がいるので、その友人についてのビデオを作ることに決定した。そして具体的な構成を絵に描かせる。



5、6日目

前回作成した絵コンテを元に屋外に出て撮影を行った。バンダアチェの町の様子や地震・津波で破壊された様子など、それぞれのチームが同じ対象物を自分たちのセンスで撮影して行った。興奮し過ぎて遠くまで行ってしまいう子も見られた。



7日目

彼らが通っている学校を撮影。普段勉強している教室やクラスメイトにカメラを向け少し得意げな様子だった。主人公の青年の学校生活を撮影。



8 日目

ビデオチームのクラスメイト（アンディ）にインタビュー。彼は昨年の地震と津波で父親と妹を亡くした。

質問 「地震があったときはどこにいたんですか。」

アンディ 「友達とサッカーの試合をしに広場に行く途中でした。そしたら大きな地震が来て皆出学校まで走って逃げてきました。最初はただの洪水かと思ったんです。そしたら誰かが『津波が来た』と叫びました。2日後、父親と妹が死んだと知らされたんです。」

質問 「そのときはどういう気持ちでしたか。」

「もちろん悲しかったです。」

体が大きいアンディ君は何事もなかったように陽気

に答えていた。それはあたかも家族の死を克服しているかのようなようだった。しかし彼のことを良く知るビデオチームの青年がこう語った。

「克服してるように見えるけど、津波が来る前はもっと太っていたんだ。それが今ではずいぶん体重も落ちたし、タバコも吸うようになった。そして大声で笑うことがなくなったんだよ。」



9、10 日目

先日行ったインタビューをすべて文字に書き起こした。地味な作業ではあるが、文字に書き起こすことによりインタビューの編集をスムーズに進めることができる。何度も聞き返しながら手分けをして作業を行った。



11、12 日目

ナレーションの作成、収録。場面ごとにナレーターを変えて収録を行った。コンピュータで画面を出して操作する係、マイクを調節して録音する係、ナレーション係と本格的なスタジオ風に作業を進めた。しかし収録途中、外でバイクが走ったり、騒音が聞こえたりして何度も中断することもあった。映像だけだった作品が、こうしてナレーションを入れることによりひとつの作品として生まれ変わっていく。



所見：

今回の地震・津波で、ビデオワークショップ参加者が通う高校では生徒 1,113 人中 249 人もの生徒の命が奪われた。津波発生後 1 ヶ月が経過し、子どもたちの気持ちも落ち着いた頃に学校が再開された。しかし教室に集まった生徒たちは、様変わりした学校と人数の減ったクラスに戻ることで、再びあのときの悲しみが思い返されたという。

ビデオワークショップを開催した時期はそれよりもさらに 2 ヶ月が経過しているためか、悲しい表情は見せることもなく日本にいる子どもたちと何ら変わることがないように感じられた。しかし津波で被害にあった場所を撮影しに行くと、「ここにはたくさんの友達が住んでいたの…」と遠くを眺めながら涙ぐむ子もいて、現地の子どもたちに対して長期的かつ関係の深い支援の必要性を感じた。

被害の状況や精神的なショックは、それぞれの子どもたちによって異なる。今回のビデオワークショップを開催し、協力して一つの作品を制作することにより、自分たちの気持ちをお互いに共有することができ、自然とお互いをいたわることを再認識することができたように思える。そして、この自分たちの経験をインドネシアの人々をはじめ日本の人々にも伝えるという意識が育まれた。ビデオの制作や鑑賞を通して、少しでも彼らの気持ちが前向きに動き出してくれることを強く望む。なおこの作品は日本語とインドネシア語ならびに英語で制作され、インドネシアのテレビ局でも放映されるよう交渉中である。

